

真の救い主を求める旅

マタイ2章01～12節
2020年12月27日
松田 基子 師

神様は、人間の、その罪による永遠の滅びからの救済計画を、神の御子の贖いによって、解決することをお決めになりました。御子の誕生までは、その祖にお選びになったアブラハムから、イエス様がお生まれになるまでに、二千年も掛かりました。神様はアブラハムの子孫、イスラエルを御自身の民に育て、預言者を通して、ダビデの系譜から、救い主メシアが誕生する事を、繰り返し約束してこられました。

イスラエルの民は、救い主メシアの誕生の約束を、どの時代にあっても、忘れることなく待ち望みました。そして彼らの考えでは、

「神様がお与えになる救い主なのだから、ダビデの系譜で、富も、力も、知恵も、何もかも揃った、素晴らしい名家に生まれ、イスラエル中が、『それだ・・・』と分かる様にして、お生まれになるに違いない」

と考えていた様です。

それなのに、神の御子イエス様は、この世的には見栄えのしない、貧しく低き所にひっそりと、家畜小屋で乙女マリアを通してお生まれになりました。神様は、神の御子の誕生を、イスラエルの人々に鳴り物入りで知らされることはありませんでした。神様が人間に求められたものは、御自身の**真実に対する信仰**でした。

信仰、それは神様の前に**遜**(へりくだ)り、御言葉をそのまま受け取って、**信じ、踏み出す**ことです。ルカ福音の2章を見ますと、神様は、その備えのあった羊飼いだに、天使を遣わして、ルカ福音書 2章11節で、

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって、飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけ

るであろう。これがあなたがたへのしるしである。」と告げられました。

羊飼いだ達は、神様のその言葉を信じて立ち上がり、ベツレヘムの家畜小屋に行き、神の子、救い主メシアを見出し、喜び、拝しました。彼らは喜びに溢れ、その一部始終を周りの人々に知らせに行きましたが、ルカ 2 章18節を見ますと、

「聞いた者は皆、羊飼いだたちの話を不思議に思った。」

だけで、神の御子を礼拝しようと、家畜小屋に行った人は居ませんでした。

ところで、神様にとって、愛の対称は、イスラエルの民だけではありませんでした。イスラエルは神様が先祖アブラハムに約束された通り、神様の祝福の源となるためでありました。彼らは創世記22章18節に記されていますように、

「地上の諸国民は全て、あなたの子孫によって祝福を得る。」

つまり、神様の祝福が全世界に広がるためにパイ役選ばれたのでした。

神様の愛の対称は全世界、全人類に及ぶのです。マタイはその事を私たちに知らせていません。マタイ福音書2章1節に、

「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。」

と記されています。神の御子であるイエス様は、人類の歴史の中に、人として入って来られました。マタイはその事を、歴史上の確かな事実として、ヘロデ王と関係づけています。

このヘロデは、ヘロデ大王のことで、彼は、紀元前37年から、紀元4年まで、40年もの間、当時の地中海世界の支配者、ローマ帝国から、イスラエル全域の王の称号を得て、その地に君臨しました。ヘロデ大王の治政下、イエス様の誕生は、紀元前7年とも、4年とも言われています。ヘロデ大王はユダヤ人ではなく、イドマ

ヤ人でした。皇帝アウグストゥスの信任を得て、イスラエルの治政に関しては、自分の思いを通すことが出来ました。彼は複雑な税制を敷いて国の財力を強めました。優れた商才をもった強権的な独裁者でした。

そんなヘロデ大王を、不安に陥れる人々が現れました。その人たちは東方から訪れた占星術の学者たちでした。

彼らは東方ペルシャ地方の占星術の学者たちでした。あの、チグリス・ユーフラテスの肥沃な地に栄えた文明を支えて来たものに、占星術があります。彼の地方では星を観測することによって、種蒔きや刈り入れ時を指示し、また、人々の運命、戦いの予測、国運など様々なことを占い、世界の趨勢(すうせい)を占うと言う、占星術が非常に盛んでした。学者と呼ばれる人々は、そう呼ばれるに相応しく、その道を極めていった人達です。

ユダヤの地に、

『世界を動かす王が生まれる』

という言い伝えは、紀元前586年のユダ王国滅亡で、バビロンに捕囚民として連れて行かれたユダヤ人の信仰に、端を発しているであろうと言われています。

民数記24章17節には、バラムのイスラエルに対する預言が記されていますが、

「わたしには、彼が見える。しかし、今はいない。彼を仰いでいる。しかし、間近にはない。ひとつの星がヤコブから進み出る。」

この言葉は、メシア預言とされています。

東方では、東から西に向かって、特別に輝く星が流れる時、世界を支配する王が生まれると信じられていたそうです。彼らは東方でその星を見たのです。

「あの星は間違いなく、世界を支配する王の出現を知らせる輝きだ」

と、彼らの意見は一致しました。彼らは言い伝

えに従って、ユダヤに偉大な王が生まれると言う預言が実現したのだと信じました。彼らはその星を見つけたからには、そのお方に会いにいかずにはいられなくなりました。

「自分達がこれまで人生を賭けてきたものを、その真実を見極めたい。」

その強い思いに押し出されて、彼らはユダヤへ旅立つ決心をしました。

旅の厳しさは予想されていましたが、彼らは、世界の救い主に、どうしても会わずには居られませんでした。彼らは砂漠を越えて、ユーフラテス川沿いを北上し、シリアから南下して、イスラエルの都エルサレムにやって来ました。

千キロ以上の長い旅でした。彼らにしてみれば、

『ユダヤ人の王がお生まれになったのだから、都エルサレムで聞けばどこに居られるのかは、直ぐに分かる。』

と思いましたが、そこで、2節に、

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこに居られますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

と尋ねました。

服装の違いに、一見して東方の人々だと分かりました。そんな遠くから、ユダヤ人の王の誕生を確かめ、礼拝するために遙々やって来たというのですから、何よりも現に王位にあったヘロデ大王は動揺し、不安を抱きました。

3節には、

「エルサレムの人々も皆、同様であった。」

とあります。ヘロデ大王はユダヤ人に対しては懐柔と圧制の両策で臨んで、民衆の深い憎しみを買っていた人でした。そうであればユダヤ人にとって、ユダヤ人の王は、つまり待望のメシア救い主の誕生を意味しており、喜ばしいことである筈ですが、彼らもまた、

『不安を抱いた』

というのは、そのメシア待望が、
『神様への深い信頼に基づくものでは
なかった』
からだと言えるでしょう。

動揺したのはエルサレムの民衆ばかりではあり
ませんでした。4節に、
「王は民の祭司長たちや、律法学者たちを
皆集めて、メシアはどこに生まれることに
なっているのかと問いただした。」

とあります。ヘロデ大王はここで、
「メシアの誕生」
と、はっきりと言っています。それはイスラエルの
歴史に預言されて来たことです。ですから、
祭司長達や、律法学者達は、その専門であり、
すぐに答えることができました。

5節に、
「彼らは言った。ユダヤのベツレヘムです。
預言者がこう書いています。
『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの
指導者たちの中で、決していちばん小さい
ものではない。お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるから
である。』」

これは旧約聖書ミカ書5章1節からの引用です。
本来なら、祭司長や律法学者たちこそ、聖書に
精通し、メシア誕生の約束を信じていることを誇
りとしてきたのですから、神様の前に遜って待ち
望み、その知らせを受けたならば、真っ先に礼
拝に行くべき人達でした。

しかし、彼らは遙々東方から来た占星術の学
者達のために、立ち上がって、道案内をすること
もしませんでした。彼らは知識だけの、自分の
考えに立った信仰者でした。

メシアの誕生に、一番不安を感じたのは、
ヘロデ大王でした。自分の王位が奪われては
なりません。彼は、メシアの暗殺計画を内に秘
めて、占星術の学者達を密かに呼び寄せました。
ヘロデの心は既に悪行に傾いていました。

メシアの誕生を知らせるために、輝いた星の
出現を聞いて、その時期に生まれた赤ん坊を
皆殺しにする積もりです。しかし、ヘロデは
心とは裏腹に、学者達に、

「行って、その子の事を詳しく調べ、見つかっ
たら知らせてくれ。わたしも行って拝もう。」
と学者達には如何にも信心深く装い、彼らを利用
するために送り出しました。

占星術の学者たちは、異国の地で、右も左も
分からず、ただ教えられた方向に進みました。
するとどうでしょう。9節に、

「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、
東方で見た星が先立って進み、ついに
幼子のいる場所の上に止まった。」

とあります。占星術の学者達は、自分達の信
念でユダヤ人の王、つまり、メシアの出現を信じ
てエルサレムまでやって来た積もりでしたが、
実際には神様が、彼らにも救い主誕生による救
いを与えたいと、神様御自身が、導き見守って
こられたのです。その時彼らにはそのことが分
かったのです。学者達はその星を見て、星を
創り、万物を造り、動かし、導いておられる神様
の存在に気付きました。

星の神々ではなく、星も創り、天地万物をつく
り、支配しておられる神様が、自分達を世界の
救い主、メシアに会わせるために、自分達に特
別の星を見させ、導いて下さったことに、彼らは
気付き、心からなる感謝と喜びが湧き上がって
来たのでした。

神様は必ず、御自身の御心へと導いて下さる
お方です。11節に、

「(彼らが)家に入ってみると、幼子は
母マリアと共におられた。」

とあります。そこはきっと、貧しい家であったに
違いありません。そこに、母マリアに抱かれて
おられる幼子が、メシア救い主なのです。
学者達はそこで、人間的な証明を求めることは
ありませんでした。彼らはただ、ここまで導かれ
た神様を信じました。

彼らは幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈りものとして献げました。黄金はイエス様が王であること、乳香は神であられること、没薬は受難と埋葬を現すとの解釈があり、3つの贈りものによって、イエス様がメシアであることが証されていると言われていますが、また、一説には、黄金、乳香、没薬は占星術の道具であったとされます。

彼らは、

『自分達の人生を、真に導くお方は、天地万物を創り、星を創り、星を動かし、万物を動かし、人を導いておられる創造主である**神様である。**』

事が分かりました。そのお方が、世界を救うために、メシア・救い主をこの世に誕生させられたのです。学者達はその事を知って、もはや星に頼って、**占う必要は無くなってしまいました。**そこでこれまで**一番大事にしてきた物をお献げしたのです。**

彼らはその夜、

「**ヘロデのところへ帰るな。**」

と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分の国へ帰って行きました。彼らは国に帰って今までとは全く違った生き方をし、周りの人々にも世界の創造主とメシア、救い主を伝えたに違いありません。彼らの人生も、全く別の道、天地万物を創造された神様を信じ、救い主メシアを信じる人生に変えられたのです。

神様の**愛の対称は、全世界の人**であり、全ての人がイエス・キリストを真のメシア救い主として**信じ、救われる**ことを、神様は願っておられるのです。神様のこの愛を私たちも心遜(へりくだ)って受け取り、イエス・キリストを真の救い主として信じ、伏し拝んで参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

神様は、全世界、全人類を、御自身の愛の対称として下さり、全人類の救いの為に御子イエス様をこの世にお与えになりました。その深い御心と、ご愛に心から感謝致します。

これから洗礼式を執り行いますが、受洗する二人を、生涯、神様の愛、イエス・キリストの救いを信じ、信仰を全うしていく者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。